



香里ヌヴェール学院 移転 90 周年記念式典

1921年、フランスから来たヌヴェール愛徳修道会が玉造教会で始めた小さな語学学校は数年後、聖母女学院高等女学校となった。現在の寝屋川市に新校舎が建てられ、移転したのは1932年のこと。6月4日、同校のベルナデッタ・ホールでこの移転90周年を祝う式典が催された。

記念ミサを司式した前田万葉大司教は「風薫る香里ヌヴェール卒業かな」、「仕合せの香里ヌヴェール聖五月」と祝い句を贈った。「学校法人聖母女学院」として聖母マリアの名をいただく同校が建学精神を改めて思い起こし、児童や生徒、教職員、保護者や地域の人びととさらに深い愛で結ばれ合うようにと願いをこめた。

式典には教職員の他、ヌヴェール愛徳修道会のシスターや同窓会、保護者会など関係者を含めおよそ200人が参列。児童・生徒たちは披露の場で、学校の歴史を振り返りつつ未来に向かおうとする様子をさまざまに表現し、大司教はじめ参列者は熱心に鑑賞した。その後、大司教は新装オープンした食堂の祝福を行い、参列者と歓談しながらフランスのお菓子「クレームブリュレ」を堪能。学校関係者に励みを与える一日となった。

主催者の感想 記念式典を挙げるにあたり、前田大司教様をはじめ、教区本部事務局、香里教会の皆様にご大変お世話になりました。私たちにとって、教会と学校とが一致しながら

歩んでいることを改めて認識できた、記憶に残る素晴らしい式典となりました。皆様のご協力に心から感謝いたします。



吹奏楽部の校歌演奏に聴き入る前田大司教



シスター戸村晴美から
この二冊

司牧者がリレー形式で若者たちにぜひ読んでほしい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は、シスター戸村晴美（師イエズス修道女会、なみはや教会担当）が担当。



司牧者から
若者たちに
この一冊

その18

『神父燦燦―カトリック司祭58人に聴く』（カトリック新聞社編さん、教友社2010年、税込1320円）

幼い頃、将来の自分がこんなに遠い所に住むようになるとは考えてもみなかった。ましてや「大阪カトリック時報」の原稿を書くなど思ってもみなかった……。

人の生き方はそれぞれだといつも思う。生まれた時からずっと地元を離れたことがない生活を送る人もいれば、全く知らなかった町で生涯を終える人もいる。今まで多くの神父様方と接してきた。特に外国から宣教師として来られた神父様方が日本語に苦労しながらも、ニコニコと笑顔で話しかけてくださることに、こちらのほうがどれほど勇気づけられたことか。

この本は、「神」とは一人ひとりに合った不思議な方法で「語りかけられる神」

だと思える。たしかに、情報だらけの今の世界では「語りかけられる神」の声を聴くことが難しいかもしれない。しかし、神の声は人を動かす。必ず動かす。「神の語りかけを聴いた」人びとのストーリーを読み、「神に動かされた人」の躍動的な喜びを共に体験してほしい。



『神様のカルテ』（夏川草介、小学館文庫、2011年、税込682円）

『神様のカルテ』は「一人ひとりに神様が定めたカルテがある」という。作中に出てくる劇薬「砂山ブレンド」、いつか作ってみたが、飲む勇気がない。そんなわたしからのおすすめの一冊。

今回は、中島貴幸神父（オプスデイ属人区）です。

大きな魚でいっぱいの網を引き上げる者になります。

次に「弟子たち」ですが、岸辺に立つ人物がイエスだとは分かりませんでした。しかし、イエスの愛しておられた弟子が主だと気づき、ついには誰もが主であると知るようになります。

「食べるもの」ですが、岸辺に立つキリストに尋ねられた時にはありませんでしたが、陸に上がった弟子たちには、パンと魚が用意されており、イエスが弟子たちに与えます。これは、今のミサに当たる祭儀を示していると思われます。

「網」については、岸辺に立つイエスの「舟の右側に網を打ちなさい」という指示に従うと思わぬ大漁が起こり、ペトロを除く弟子たちがその網を引いて戻りますが、魚でいっぱいの網は破れているとされています。弟子たちは、宣教の業に励むことになりました。

やる気スイッチのことでありますが、今日の福音に登場する弟子は7人です。イスカリオテのユダは死亡しているため、4人足りません。

どうも宣教活動を止めていたみたいですが。残る7人もシモン・ペトロが漁に行くと言うと、残りの6人もついてゆきました。これは生活費を得るため仕方なかったという説もありますが、イエスが生きていた時はなかったことなので、元の仕事に戻ったり、バイトに出かけたりした者もいたというのが本当のところではないかと考えられています。

しかし、漁も失敗で、何もかもうまくいきません。そんな時、イエスと出会いますが、イエスだと気づきません。これはイエスの顕現物語の特徴です。そして、イエスはいろいろと教え、弟子たちはイエスだと気づきます。イエスが今も生きて、共にいてくれると分かり、やる気が出てきます。復活のイエスとの出会いが、弟子たちのやる気スイッチを押すことになりました。それによって弟子たちは、十字架と復活を頂点としたイエスの言葉と行いの上に立ち、外に向けてはそのイエスを告白し、内においては神への賛美と感謝を表す者になりました。そして、それが「教会」になりました。



「信仰の時間」

ABC ラジオ(朝日放送)
毎週日曜日 5:50~6:00AM

5月担当：山口 武史 神父(園田教会)

やる気スイッチ (1日放送分より)

「やる気スイッチ」という言葉があります。教育系の企業コマースで聞きます。全く勉強のやる気がない子どもの体にあるスイッチを押すと俄然やる気が出て、勉強に熱が入るといいます。そんな馬鹿などと思いつつも、指圧器を買ってきて体中くまなく押ししてみましたが、全く何も変わりませんでした。医学的にもやる気スイッチは存在しないとされていました。しかし、この会社の方針には「お子様の今の能力や性格に合わせた学習指導をします」と書かれていました。きっかけがあれば、学力は伸びるということでしょう。そう言えば、「小2の壁」があると聞きました。小2で習う九九につまずくと、授業が理解できなくなり、やる気がそがれることが多いらしいです。そのような

子どもきっかけさえあれば勉強嫌いになっていなかったかもしれません。きっかけって大切だと思わされます。

本日は復活節第3主日で、福音はヨハネ21章1~14節が朗読されました。弟子たちが復活の主・キリストにやる気スイッチを押してもらったようです。今日の福音は、弟子たちへの三度目の顕現を描いていますが、4つの軸があります。一つ目はシモン・ペトロの様子、二つ目は弟子たちのイエスに対する態度、三つ目は食べるものの有り無し、四つ目は網に起こる出来事です。

まず、「シモン・ペトロ」は仲間「漁に行く」と宣言しますが、岸に立っている人がイエスだと教えられ、上着をまとって湖に飛び込みます。さらにイエスに従い、

